

シードラ ちゃん のこと

子どもや家族への
医療支援にご協力ください。



手術前の左手、中指が折れ
曲がっている

シードラちゃんとお母さん

ブルジシェマリキャンプで出会った6歳半の女の子シードラちゃん。お母さんやおばあさんと6月にシリアのセットゼイナブキャンプからレバノンに避難してきました。彼女はシリアで爆撃に会い、全身に大けがを負っていました。指が折れ曲がってしまい、膝の骨が折れ、足にも大きな傷が残ってまっすぐ歩けず、痛みが伴う状態です。大けがをした3日後、実家に行くと言って出かけたお父さんは行方不明です。母子は父親の帰りをシリアで待っていましたが、爆撃が続き、後ろ髪を引かれる思いでシリアを後にしました。いまの住居にはトイレもありません。

シードラちゃんは非常に利発な子どもで、質問にもしっかり答えていましたが、本人も母親も特に指のまがっていることが非常なトラウマになっており、痛みを伴う上に周りにいじめられると泣いていました。そこで受診できるように関係機関を回りました。

診断の結果、①指を切断と縫合手術。②膝の骨が折れたため15回の理学療法が必要。③歩行訓練のため、歩行シューズを履く必要がある、とのこ

とでした。

お母さんはパレスチナ人ですが、お父さんがシリア人であることから、改めてUNHCRに登録して、提携下にある病院で指の手術を受けることができました。国連から一部支援が出ましたが、生命に係わるケースではないということで自己負担分があり、自分たちでは手術費用を出せないのが当会が支援をしました。

「日本の皆さんありがとう」

手術後シードラちゃんを訪ねました。まだ指の付け根を縫い合わせた後が痛々しい状態でしたが、本人は目を輝かせていました。最初訪れた時は、泣いてばかりだったおばあさんも笑顔で料理の準備をしてお母さんも明るくなっていたことに驚きました。

手術の際、シードラちゃんはとても勇敢で、お母さんがついてなくても大丈夫だといって、局部麻酔をかけられた状態で、自分の手が手術される経過も見ていたとのこと。自分の指がきれいになったことにとっても喜んで、日本の皆さんにとっても感謝している

と言っていました。お隣の子とも一緒に遊んでいる様子も別人のようでした。

つながりが希望に

シリアから避難して誰からも見放されていたかと思っていたところ、当会との出会いがあり、ソーシャルワーカーたちも見守ってくれている。国連も支援してくれた。そういうつながりを実感できたのでしょうか。これから先も孤立無援でないと認識できたことで彼らがとても明るくなり、希望を感じるようになったのだと思いました。

これから膝の理学療法を受け、歩行訓練のためのシューズを用意する必要があります。1年遅れですが、幼稚園にシードラちゃんを通えるように、引き続き支援したいと思います。

シリアからの避難民家族の中には、治療を必要としながらも医療費が払えず、諦めているケースがたくさんあります。パレスチナ子どものキャンペーンでは、こうした多くの子どもや家族を支えています。そのための募金にご協力くださいますようお願い申し上げます。

母子家庭を集中的に支援

シリアでの内戦は激化し、死者が10万人を超え、毎月5000人が亡くなっていると言われます。8月下旬で国連に登録している難民は200万人になりました。そのうち74万人は11歳に満たない子どもです。亡くなった子どもは7000人にのぼり、また200万人以上の子どもたちがシリア国内で逃げ惑っていると推計されています。また、シリア在住のパレスチナ人の1/5(10万人)がレバノンに再難民として逃げてきました。

レバノンには、非登録の人を含めて100万人が入国しています。当会ではレバノン国内にあるパレスチナ難民キャンプ(ブルジシェマリ、ラシャディエ、ブルジバラジネ、バダウィ、ナハルエルバレド等)に流入してきた、シリアからの避難民の女性と子ども世帯に、シリア人・パレスチナ人の区別なく、4月から支援を開始しました。

- 生活物資や食糧を配布し、継続した訪問支援によりセイフティネットを提供。
- 幼稚園・補習クラス等への子どもたちの受け入れ、居場所提供と心理サポートの実施。
- 医療支援実施と女性向けの心理サポート。



母親と子どもだけの世帯で15歳以下の子どもが複数いる、あるいは5歳以下の乳幼児が1人以上いる家族が対象で、さらに夫はいても病気や障害等で働けない家庭を追加。選定の際は家庭を訪問し、調査表に記入の上、リストを作成しています。女性世帯主の家庭は非常に困窮している割合が高いのですが、それは以下のような理由です。

- 女性の就労機会は非常に限られている。特に幼少児がいる場合の就労は困難で、また専門職などを除くと、女性の就労に偏見がある。
- 夫を亡くした女性が再婚して子どもを養っていくことへの偏見が強い。
- 男性中心社会のため、住居探しなど様々な交渉は、女性に不利になるケースが多い。
- 女性は外に出ないことが良いとされ、知り合いがほとんどいない場合、有益な情報へのアクセスが難しい。特に「未亡人」は最低3か月の服喪が求められ、支援情報、機会などを逃すことになってしまう。

これまでに、713世帯に物資配布を実施しました。配布の内容は以下のようなものです。

- 食料:米、砂糖、茶、牛乳、チーズ、缶詰肉、コーンオイル、ひよこ豆のペーストなど。
- 生活物資:石鹸、シャンプー、消毒剤、洗剤、生理用品、紙おむつ、洗剤、など。劣悪な住環境の場合は扇風機も配布。



支援を受けている人たちの声

「夫に避難するように言われ、シリアのアレッポから3人の子どもを連れてレバノンに逃げてきた5日後に、夫はシリアで爆撃を受けてなくなりました。それ以来どこにも出かけていません。年老いた母と全盲の父もいます。収入を得るすべがないため支援がなければ生活できません。(アマルさん、33歳/バダウィ)」

「今年の1月に、シリアから逃げてきたの。家族はビザが取れなくてシリアに残ったまま。私は、伯父さん一家の家に世話になっています。お父さんは行方がわからない。シリアでは、毎週末にピクニックを楽しんだのよ。今日は、シリアの時みたいに、川で遊べて本当に嬉しい。早く家族に会いたい。」(リアファさん、14歳/ブルジシェマリ)

「夫はシリアで殺されました。9人の子どもを連れて、1年2か月前にアイネヘルウェキャンプにやってきました。トラウマがひどいこの子の状況がカウンセリングで良くなることを願っています。」(心理サポートセンターを受診したアヤットちゃん(6歳)の母親)

最近レバノンは非常に緊張していますが、避難してきた子どもとお母さんたちが笑顔になれるよう、支援活動を継続します。